

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530838

研究課題名(和文) 青年期の愛着スタイルとその形成過程が自己の確立と将来への展望に及ぼす影響

研究課題名(英文) Effects of early adult's and adult's attachment styles and their formation processes on the establishment of identity and time perspectives toward future

研究代表者

金政 祐司 (KANEMASA, YUJI)

追手門学院大学・心理学部・准教授

研究者番号：70388594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本申請研究では、自己ならびに他者への信念や期待として捉えられる愛着二次元が、社会へのイメージを媒介して将来への時間的展望に及ぼす影響についての検討を行った。予備調査と研究1で社会イメージ尺度の作成が行われ、研究2では大学生571名、青年期後期社会人590名、成人期前期社会人397名を対象に調査を実施した。上記の3群に関して、いくつかの変数で平均値の差異が認められた。しかしながら、仮説モデルについての分析を行った結果では、3群で共通して、関係不安は、ネガティブな社会イメージを、また、親密性回避は、ポジティブならびにネガティブな社会イメージを媒介して将来への時間的展望に影響を及ぼすことが示された。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted to examine a model in which the relationships between adult attachment dimensions as beliefs and expectations about self and others and time perspectives toward future were mediated by social images. Social Image Scale was developed in a pilot study and Study1. Participants in Study 2 were 571 undergraduates, 590 late adolescence working people, and 397 early adulthood working people. The result showed that there were mean differences on several variables among the above three groups. However, the results of a multiple-group analysis about the model revealed that the relationships between Anxiety and time perspectives toward future were mediated by negative social images, and the relationships between Avoidance and time perspectives toward future were mediated by positive and negative social images in the three groups.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：成人の愛略理論 青年・成人期の愛着二次元 社会イメージ 将来への時間的展望 大学生 社会人

1. 研究開始当初の背景

Bowlby(1982)によれば、愛着システムの主たる目的は、個人の安心感を確保することにあるとされる。ここでいう安心感とは、世界は安全で、保護やサポートについて他者を拠り所とすることができ、また、自分の置かれた状況や環境を探索し、何かを失うことへの過度な不安を抱くことなしに様々な活動に従事できるという感覚(Mikulincer, Shaver, & Pereg, 2003; Shaver & Mikulincer, 2011)である。このような安心感をいかにして獲得するのか、そのためのプランニングやストラテジーは、愛着の個人差である愛着スタイル、あるいはその基盤となる内的作業モデルによって影響を受ける。成人の愛着理論では、乳幼児期の養育者との関係において形成された自己ならびに他者への信念や期待である内的作業モデルが、個人の注意や行動、思考を方向付け確証的に維持されていくことで、また、個人の対人関係のテンプレート(铸造)として機能することで、その後の発達段階での対人関係の諸側面にまで影響を及ぼすとされる。つまり、内的作業モデルは、個人の発達段階においてその影響範囲を漸次的に養育者との関係から対人関係全般にまで般化、拡張させていくというのである。

近年の研究では、内的作業モデルの自己への信念や期待は、関係不安として、他者への信念や期待は、親密性回避として捉えられる概念であるとされている(Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。関係不安の高さは、自己への確信のなさや相手から見捨てられることへの不安感を引き起こし、親密性回避の高さは、他者への不信感や他者や親密な関係を形成することへの抵抗感を経験させるものと考えられている。

このように内的作業モデルが自己や他者に関する信念体系であるとともに、自分の周りの世界をどのように捉えるのかに影響し、外界情報の認知や自他の行動のシミュレーションを方向付けながら一般化、抽象化されていくのであれば、内的作業モデルは、個人を取り巻く対人関係の認知や行動、感情に対して影響を与えるというだけでなく、より広範に自身の置かれた世界や社会をどのように捉え、どう認識するのかに対しても影響を及ぼし得る可能性がある。つまり、二者関係において構築された自己や他者への信念や期待である内的作業モデル(愛着次元)は、より広範で抽象的な対象である社会について個人が抱くイメージにも影響を及ぼすものと考えられるのである。

また、内的作業モデルは、個人が自身の置かれた世界をどのように理解し、解釈するのかに対して影響を与えるとともに、将来の予測や行動のプランニングにも影響を及ぼすとされる(Bowlby, 1973/2000, 1980/1982)。この点に関しては、たとえば、愛着と探索的行動との関連について検討した研究におい

て、関係不安は、失敗への恐れや目標追求に対する困難さの認知と正の相関を、親密性回避は、目標達成への欲求や目標追求に対するコミットメントと負の相関を示すことが報告されている(Elliot & Reis, 2003; Mikulincer & Shaver, 2007)。さらに、日記法を用いたカップル研究(Campbell, Simpson, Boldry, & Kashy, 2005)でも、関係不安の高い個人は、関係内の葛藤やサポートに関する諸事が将来の関係の質(幸せや安定性)に影響を及ぼすと考えやすく、加えて、関係内の葛藤の認知が高い場合に、将来の関係の質を悲観的に捉えやすくなることが報告されている。このことから、本研究では、将来の予測や行動のプランニングを捉えるものとして将来への時間的展望(本研究では、目標指向性(将来の目標があるか、そのために何か準備をしているか)と希望(自分の将来に希望を抱いているか)の2つの概念を扱う)を取り上げ、愛着次元との関連について検討を加える。

ただし、この青年・成人期の愛着次元と将来への時間的展望との関連は、先の社会イメージによって媒介される可能性がある。前述のように、愛着次元は、現在、自らが置かれている社会や世界をどう捉えるのか、また、そこから得られる情報をどのように認知、処理するのかにバイアスをかけることから、それらは将来への時間的展望に直接的に影響を及ぼすのではなく、社会へのイメージを介することで将来への時間的展望に影響を与えるというプロセスが想定され得る。それゆえ、本研究では、自己や他者への信念や期待である愛着次元が、より広範で抽象化された個人の社会へのイメージに影響を及ぼし、それらが将来への時間的展望を規定するというモデルを設定し、その妥当性について検討を加える。

このような青年・成人期の愛着次元と個人が抱く社会イメージならびに将来への時間的展望の関連性について検討を行う際、その個人が社会に出て就労しているかどうかの有無や個人の発達の段階は考慮すべき重要な要因となるであろう。たとえば、大学生と社会人とでは社会イメージや将来的な時間展望自体が異なることが予想され得ると共に、それらと愛着次元との関連性についても双方で異なる可能性は十分にある。さらに、個人の年齢的な要因、発達段階についても同様のことが言えるだろう。それゆえ、本研究では、大学生のみならず社会人についても研究の対象とし、加えて、社会人に関しては、大学生とほぼ同年代である18歳から24歳の社会人と、それ以上の20代、25歳から29歳の社会人を対象としてデータの収集を行う。

2. 研究の目的

先の研究背景を踏まえ、本研究の概要と主たる目的を記す。本研究では、最初に社会イ

メージ尺度を作成することを目的とし、予備調査にてその項目の収集を行うため自由記述による質問紙を実施する。次に、研究1では、予備調査において収集された項目を用いて調査を実施し、社会イメージ尺度の作成を行う。さらに、研究2では、大学生、18歳から24歳までの青年期後期社会人、25歳から29歳の成人期前期社会人の3つの群を対象に調査を実施し、愛着二次元、社会イメージ、将来への時間的展望のそれら3群間の差異を検討する。加えて、自己や他者への信念や期待である愛着二次元が、より広範で抽象化された社会イメージを媒介して将来への時間的展望に影響を及ぼすというプロセスについて、上記の3群について共分散構造分析による多母集団同時分析を行い、その影響過程の妥当性の検討ならびに3群間の共通項と差異を明らかにする。

3. 研究の方法

【予備調査】

予備調査では、社会イメージ尺度の項目の収集を行うことを目的として、関西圏の6大学、中部圏の1大学において、自由記述式回答の調査を行った。調査回答者は、男性61名、女性113名の計174名(平均年齢20.71歳; SD = 1.08) 調査時期は、2011年10月から11月であった。

【研究1】

研究1は、先の予備調査において収集された暫定版社会イメージ尺度101項目を用いて調査を実施し、社会イメージ尺度を作成することを目的として行われた。

関西圏の6大学、中部圏の1大学にて心理学に関する講義を受講している学生を対象にして質問紙調査を実施した。調査実施の際には、データは統計的処理されるため調査協力者の匿名性は保たれることが説明された。質問紙の回答者は、650名であったが、回答に不備のあった者を除外し、男性213名、女性424名の計637名(平均年齢20.72歳; SD = 1.15) を分析の対象とした。調査時期は、2012年1月から2月にかけてであった。

調査項目は、個人の抱く社会に対するイメージを測定するために、予備調査で収集した社会イメージに関する101項目(暫定版社会イメージ尺度)であった。回答者は各項目について、自分にとっての社会のイメージや社会という存在にどの程度当てはまるかを“全く当てはまらない = 1”から“非常によく当てはまる = 7”の7件法での評定を行った。

【研究2】

大学生のデータは、関西圏の5大学で心理学に関する講義を受講している学生を対象に質問紙調査を実施し、収集を行った。質問紙に回答した者は594名であったが、質問内容を理解して回答していないと判断されるものを除外し、男性219名、女性352名の計571名(平均年齢19.56歳; SD = 1.12) を分析の対象とした。なお、調査実施の際、デ

ータは統計的処理されるため調査協力者の匿名性は保たれることが説明された。調査時期は、2012年5月から7月にかけてであった。

社会人のデータは、株式会社マクロミルによるウェブ調査にて収集された。青年期後期社会人(18歳~24歳)は618名、成人期前期社会人(25歳~29歳)は412名のデータが収集されたが、先と同様、質問内容を理解して回答していないと判断されるものを除外し、青年期後期社会人は、男性291名、女性299名の計590名(平均年齢22.64歳; SD = 1.46)、成人期前期社会人は、男性196名、女性201名の計397名(平均年齢27.23歳; SD = 1.38) を分析の対象とした³⁾。なお、調査時期は、2012年10月であった。

調査内容は、以下の通りである。

a. 一般他者版 ECR (中尾・加藤, 2004; 20項目, 7件法)—愛着の二次元、関係不安と親密性回避の測定尺度。

b. 暫定版社会イメージ尺度(43項目, 7件法)—研究1において作成された「成長・向上」、「束縛感・不自由さ」、「閉塞感・困難さ」、「不可避・義務」の4因子からなる個人が社会に対して抱くイメージを測定する尺度。

c. 将来への時間的展望を測定する尺度(白井, 1994; 9項目, 5件法) - 時間的展望体験尺度の下位尺度である目標指向性(5項目)と希望(4項目)を用いた。

d. デモグラフィックな特徴を問う項目 - 大学生の調査協力者には、性別、年齢、学年を、社会人の調査協力者には、性別、年齢とともに、結婚の有無、子どもの有無、職業(のカテゴリー)等の回答を求めた。

4. 研究成果

【予備調査】

調査内容は、個人が社会に対して抱くイメージについての項目を収集するため、2つの自由記述式回答の質問を用意し、それと共に回答者の年齢ならびに性別を尋ねた。回答者は、「あなたは、社会をどのようなものであると考えていますか? もしくはあなたにとって社会とはどのような存在ですか?」、ならびに「あなたは、社会、あるいは、社会に出ること、社会のなかで生きていくことに対してどのようなイメージや印象を抱いていますか?」という2つの質問に対して、それぞれ簡潔に文章で2つ回答するよう求められた。その結果、前者の質問には346個の回答、後者の質問には344個の回答を得ることができた。それら合計690個の自由記述の回答を筆者と心理学を専攻する大学院生の2名でカテゴリー分類をしながら、社会イメージを測定するための項目として適切であると思われるものを選定した。その結果として、101項目を暫定的な社会イメージ尺度の項目として採用し、次の研究1で用いることとした。

【研究1】

社会イメージに関する101項目の評定値に対して、因子分析(共通性の初期値として SMC

を用いた反復主因子法を行った。その際、特定の因子への負荷の低い項目や複数の因子へ負荷の高い項目を考慮して、尺度項目を選択しながら繰り返し因子分析を行った結果、43項目が残存し、固有値の減衰状況(11.15、6.25、1.64、1.32、0.54、0.46)や因子の解釈可能性から4因子を抽出したのちPromax回転を行った。第1因子は、「社会は私にとって新たな自分を発見できる場である」といった項目に高い負荷が見られたため、成長・向上イメージ(以後、成長・向上)因子と命名した。第2因子は、「社会は私を束縛する存在である」といった項目に高い負荷が見られたため、束縛・不自由さイメージ(以後、束縛・不自由さ)因子と命名した。第3因子は、「社会でうまくやっていくことは大変なことだと思う」といった項目に高い負荷が見られたため、閉塞・困難さイメージ(以後、閉塞・困難さ)因子と、第4因子は、「社会は誰もが所属しなければならないところである」といった項目に高い負荷が見られたため、不可避・義務イメージ(以後、不可避・義務)因子と命名した。各因子の項目を概観すれば、成長・向上は比較的ポジティブな社会イメージ、束縛・不自由さと閉塞・困難さは比較的ネガティブな、不可避・義務はニュートラルな社会イメージと考えることができる。この研究1において作成された43項目の社会イメージ尺度を次の研究2で用いた。

【研究2】

まず、大学生、青年期後期社会人、成人期前期社会人の3群間で、愛着二次元(関係不安、親密性回避)、社会イメージ(成長・向上、束縛・不自由さ、閉塞・困難さ、不可避・義務)、将来への時間的展望(目標指向性、希望)の各下位因子の得点に差異が見られるのかについて検討を行うため、それらに関して、上記の群を独立変数とした一要因分散分析を行った。その結果(Table 1)、愛着二次元

では、関係不安において群間に0.1%水準の有意差が認められ、多重比較(Tukey法)の結果、大学生よりも青年期後期社会人、成人期前期社会人の得点の方が高かった。しかし、親密性回避においては群間の差は認められなかった。次に、社会イメージに関しては、4つの下位因子すべてにおいて群間に0.1%水準の有意差が認められ、多重比較の結果、成長・向上と不可避・義務は、青年期後期社会人および成人期前期社会人よりも大学生の得点の方が高く、束縛・不自由さならびに閉塞・困難さでは、青年期後期社会人、成人期前期社会人、大学生の順にそれらの得点が高くなっていった。この社会イメージ尺度の4つの下位尺度すべてにおいて、大学生の得点が青年期後期社会人や成人期前期社会人のものよりも有意に高いという結果は、未だ社会に出て就労していない大学生にとって、その未知なる社会に対するイメージは、それが成長・向上といったポジティブなものであると、束縛・不自由さや閉塞・困難さといったネガティブなものであると大きく膨らんでいるということを示すものであろう。また、将来への時間的展望に関しては、目標指向性で群間に0.1%水準の有意差が、希望では、5%水準の有意差が認められ、前者は大学生よりも青年期後期社会人、成人期前期社会人の得点の方が高く、後者は、成人期前期社会人よりも青年期後期社会人の得点が高いことが示された。

次に、自己や他者への信念や期待である青年・成人期の愛着スタイルが、社会イメージを媒介して将来への時間的展望に影響を及ぼすというプロセスについて検討を行うため、大学生、青年期後期社会人、成人期前期社会人の3群に対して多母集団同時分析を行った。その結果、Figure 1に示したモデルが得られ、モデル適合度は、GFI=.974、AGFI=.937、CFI=.966、AIC=.293.79、

Table 1 愛着二次元、社会イメージ、将来への時間的展望の各因子についての分散分析結果

	大学生 (1) N=562 ~ 570	青年期後期 社会人 (2) N=590	成人期前期 社会人 (3) N=397	分散分析	多重比較 の結果
関係不安	3.78 (1.11)	4.15 (1.09)	4.24 (1.00)	F(2, 1546)=26.02	*** 2,3>1
親密性回避	3.87 (0.97)	3.84 (0.95)	3.91 (0.85)	F(2, 1548)=0.76	
成長・向上	5.16 (0.91)	3.19 (0.99)	3.14 (0.89)	F(2, 1548)=813.78	*** 1>2,3
束縛・不自由さ	4.54 (0.99)	3.31 (0.97)	3.60 (0.88)	F(2, 1549)=255.39	*** 1>3>2
閉塞・困難さ	5.76 (0.80)	2.41 (0.96)	2.61 (0.88)	F(2, 1549)=2458.97	*** 1>3>2
不可避・義務	5.30 (1.02)	2.93 (1.01)	2.99 (0.90)	F(2, 1551)=1008.68	*** 1>2,3
目標指向性	2.55 (1.00)	3.21 (0.88)	3.08 (0.83)	F(2, 1552)=81.10	*** 2,3>1
希望	3.02 (0.92)	3.07 (0.96)	2.92 (0.87)	F(2, 1554)=3.41	* 2>3

Note. 表中の数値は平均値、括弧内の数値はSDを表す。なお、多重比較の結果については、大学生を1、青年期後期社会人を2、成人期前期社会人を3とした。

***p<.001; **p<.01; *p<.05

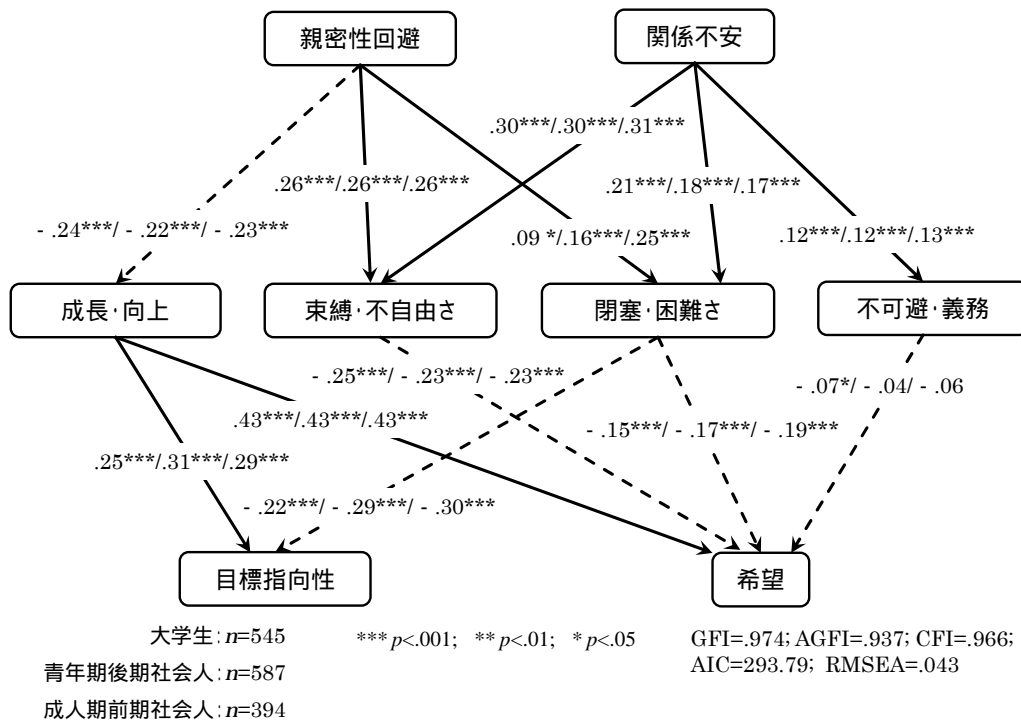
RMSEA=.043 と十分に採択可能なものであった(Figure 1)。すなわち、大学生、青年期後期社会人、成人期前期社会人の3群において、愛着次元が社会イメージを媒介して将来への時間的展望に影響を及ぼすというモデルが支持されたと言える。

Figure 1の結果を具体的に見ていくと、大学生、青年期後期社会人、成人期前期社会人の3群すべてで、愛着次元の関係不安は、束縛・不自由さ(=.30~.31, $p<.001$)、閉塞・困難さ(=.17~.21, $p<.001$)、不可避・義務(=.12~.13, $p<.001$)に対して有意な正の影響を及ぼしており、他者から見捨てられることに過度の不安を抱きやすい者ほど、社会に対して自分を束縛するといったイメージ、あるいは社会は厳しく閉塞感が漂っているといったイメージをもちやすく、加えて、社会に出ることは義務であり逃れられないと考える傾向にあった。もう一つの愛着次元の親密性回避については、成長・向上に対して有意な負の影響を(= -.22~.24, $p<.001$)、束縛・不自由さ(=.26, $p<.001$)ならびに閉塞・困難さ(=.09~.25, $p<.05~.001$)には有意な正の影響を及ぼしていた。つまり、他者と親密になることを回避しやすい者ほど、社会を成長の場として捉えにくく、また、社会というものを束縛感や不自由さ、さらに、閉塞感や困難さといったイメージで捉えやすいとすることができる。次に、社会イメージから将来への時間的展望に及ぼす影響では、3群すべてで、成長・向上は目標指向性(

=.25~.31, $p<.001$)ならびに希望(=.43, $p<.001$)に対して有意な正の影響を、閉塞・困難さはそれら双方に対して有意な負の影響(= -.15~.30, $p<.001$)を及ぼしていた。また、束縛・不自由さについては、希望に対してのみ3群すべてで負の影響(= -.23~.25, $p<.001$)が見られ、不可避・義務に関しては、大学生群においてのみ希望に対する有意な負の影響(= -.07, $p<.05$)が認められた。

先のように、大学生、青年期後期社会人、成人期前期社会人の3群間で、本研究で扱ったいくつかの変数、愛着次元の関係不安や社会イメージ尺度の4つの下位因子、将来への時間的展望の目標指向性の得点には大きな差異が認められたにも関わらず、それらに関するモデル、すなわち、愛着次元が社会イメージを媒介して将来への時間的展望に影響を及ぼすというモデルについては、それら3群間でいくつかの共通点が認められた。すなわち、自己や他者への信念や期待が、社会へのイメージに対して影響を及ぼし、それが結果的に、個人の将来への時間的展望を規定するということが示された。

本研究では、自己や他者への信念や期待が社会イメージを媒介して将来への時間的展望に影響を及ぼすことが示されたが、この結果は、自己や他者への信念や期待、あるいは社会へのイメージが変容すれば、将来への時間的展望が変化することを示唆するものと捉えることができる。愛着理論の理論的背景を踏まえれば、自己や他者への信念や期待を



* 上記は、親密性回避から閉塞・困難さへのパスならびに不可避・義務から希望へのパス以外のパスについて等値制約ありとしたモデルである。図の各線上の数値は、標準化推定値であり、左から順に大学生、青年期後期社会人、青年期前期社会人の値を表記した。実線が正の影響、破線が負の影響を示す。また、誤差変数と共分散は図から省略した。

Figure 1 愛着次元が社会イメージを媒介して将来への時間的展望に影響を及ぼすというプロセスモデルについての検討結果

変容させることはかなり困難と言えるかもしれない。しかし、社会イメージに関しては、社会を知ること等で変容する可能性は十分にある。個人の将来への時間的展望をより良きものにするためには、ポジティブな社会イメージの形成を促すような支援の必要性があると言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

金政祐司 (印刷中). 自己ならびに他者への信念や期待が社会へのイメージならびに将来への時間的展望に及ぼす影響
社会心理学研究. 第30巻2号に掲載予定

金政祐司 (2013). 青年・成人期の愛着関係での悲しき予言の自己成達は友人関係でも成立するのか? パーソナリティ研究, 22, 168-181.

[学会発表](計 8件)

金政祐司 (2013). 社会へのイメージと幸福感 - 大学生と社会人ならびに男性と女性の比較検討 - 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 35.

金政祐司 (2013). 社会へのイメージと就労動機 - 大学生ならびに社会人との比較から - 日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集, 100.

Kanemasa, Y. (2013). Adult attachment styles, social images, and time perspectives toward future in undergraduates and working people. 10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology. Yogyakarta, 46.

Kanemasa, Y. (2013). Adult attachment styles social images, and time perspectives toward future. The 13th European Congress of Psychology. Stockholm, 224.

金政祐司 (2013). 青年期の愛着スタイル、社会イメージ、将来への時間的展望 日本発達心理学会第24回大会発表論文集, 201.

金政祐司 (2012). 青年期の愛着スタイルが社会イメージに及ぼす影響 日本社会心理学会第53回大会発表論文集, 65.

金政祐司 (2012). 社会イメージ尺度の作成 - 大学生の抱く社会のイメージについて - 日本心理学会第76回大会発表論文集, 106.

Kanemasa, Y. & Taniguchi, J. (2012). The effects of perceptions of self- and other-relational mobility in opposite-sex relationships on

aggression. The 12th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. San Diego, 194.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金政祐司 (KANEMASA YUJI)

追手門学院大学・心理学部・准教授

研究者番号: 70388594